

平成24年度 関西大学年史資料展示室企画展

燦たる理想を めざして

— 大学昇格 90 周年記念展 —

大正十年二月
大學設立認可申請書
財団法人関西大學

2012年4月1日(日) 開館

開館時間 午前10時～午後4時
場 所 関西大学千里山キャンパス 簡文館1階
休館日 日曜・祝日・大学が定めた休日
入館料 無料

燦たる理想を めざして

— 大学昇格 90 周年 記念 展 —

本学は、明治19年(1886)11月4日に大阪西区京町堀の願宗寺で西日本唯一の法律学校である関西法律学校として創立され、その後、大正11年(1922)6月5日には大学令による大学として認可されました。その昇格から今年はずっと90年を数えます。

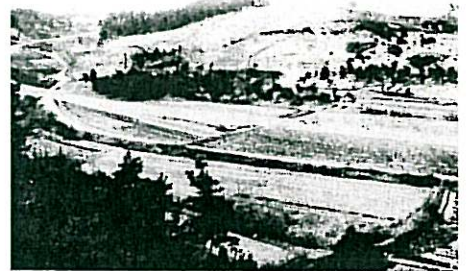
大正7年(1918)に公布された大学令は、私立大学にも帝国大学と同等の資格を認める法令であり、当時の本学首脳陣はその基準をみとすため、北摂の千里山に広大な敷地を求め、学舎を建設し、教育施設の充実を図りました。

今回の企画展では、大学昇格にいたる経緯や当時の様子、昇格を契機に作られた「学歌」や「学報」などについて、パネルや写真で解説するとともに、ゆかりの品を展示いたします。また、学内外の建物や風景から8つを選び、大学昇格のころと現在の景観を対比して紹介しています。見比べて、90年前に想いをはせていただければ幸いです。ちなみに、本企画展のタイトル「燦たる理想をめざして」は学歌の歌詞の一節からとっています。

昇格の機運

明治19年(1886)11月4日、大阪西区京町堀の願宗寺で創立した関西法律学校は、明治38年(1905)から「関西大学」の名称を使用していたが、法律的には専門学校令に基づく学校であった。

大正7年(1918)12月6日、文部省は大学令を公布し、帝国大学以外の公私立大学に対しても同等の資格を認めることを発表したが、本学はそれ以前から、近く大学令が公布されるという予想のもと、施設の整備と充実に努めていた。そのため、社団法人から財団法人へ組織を変更するとともに、拡張委員会を設けて新校地探しを続けた。その結果、大正9年(1920)4月に大阪府三島郡千里村の土地1万5000坪を入手することができた。



大正10年ごろの関西大学建設予定地
(中央に白く見えるのは電車の軌道)

昇格の実現

大学昇格のためには多額の資金が必要であった。法と商の2学部設置を計画していた本学が文部省へ納めなければならない供託金は60万円になり、その資金を調達するため、大阪財界の巨頭、山岡順太郎を会長とする関西大学教育拡張後援会のもとで積極的な募金活動が展開された。

大学設立認可申請書は大正10年(1921)2月5日付で文部省に提出され、翌大正11年(1922)6月5日、本学はついに悲願である大学昇格を果たした。これで名実ともに真の大学となった。



大学昇格と千里山キャンパスの
充実に尽力した
山岡順太郎総理事

学の実化

山岡総理事(のちに学長も兼務)は、新しい大学の指導理念として「学の実化(じつげ)」を提唱した。①学理と実際との調和 ②国際的精神の涵養 ③外国語学習の必要 ④体育の奨励の4つからなるこの理念は、その後、本学の学是として定着する。

大学昇格を果たした新生のいぶきを強く感じさせたのは「学の実化」講座の開始であった。大学の講義では得られない実践的な知識を取り入れることがこの講座の目的で、大正11年(1922)5月から5年半の間に33回開催されている。

ほかにも、学外の社会人を対象にした夏期語学講習会など、「学理と実際との調和」をモットーに、大学教育に新機軸を生み出そうとする催しが次々と実施された。



第1回「学の実化」講座で講演する
ポール・クローデル駐日フランス大使

施設の充実

山岡総理事は教授陣の充実や海外派遣留学生制度の確立などに力を注いだ。だが、体育を奨励するために、テニスコートや相撲道場などの運動施設も充実させていった。なかでも、当時「東洋一」と称された大運動場の建設にあたっては、率先して私財を投じたと伝えられている。

大正15年(1926)10月23、24両日には、この大運動場の完成を契機として、創立40周年と昇格記念式を兼ねた大学祭が開催された。多数の観客を集めた大学祭はその後も毎年行われ、大阪名物の一つにまでなった。



第1回大学祭入口アーチ(現在の正門付近)

千里山キャンパス 昔と今

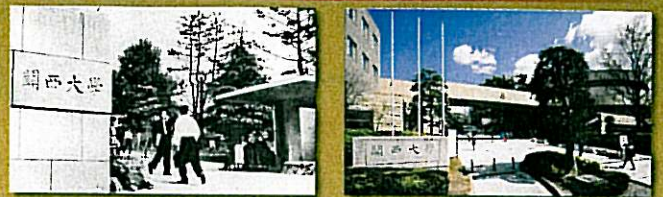
空から見た千里山キャンパス



左は、空から見た昭和4年(1929)ころの千里山学舎である。キャンパス中央には大正15年(1926)に完成したグラウンドがあり、大学本館、図書館、予科校舎なども見える。

右は、平成21年(2009)の空から見た千里山キャンパスである。大学昇格時の敷地面積約5万㎡(1万5千坪弱)と現在の約35万㎡(11万坪弱)を比較すると、90年で約7倍に拡大したことになる。周辺の景観も大きく変貌を遂げた。

大学正門



大学昇格時から戦後しばらくまでの間、大学の正門は現在の以文館の西側、法文学舎へと通じる道の途中にあった(現在も15号門として学内の出入りに使用)。

昭和27年(1952)に現在の場所へと移った大学正門(写真左)は、重厚な門扉や守衛室等を設置し、新制大学にふさわしいものとなった。さらに平成8年(1996)、新関西大学会館の建設に伴って正門付近も大幅に改修され、総合大学の正門らしい堂々たる景観へと姿を変えた。

大学本館から第1学舎へ



左は、昭和2年(1927)に完成した大学本館である。もとは北浜にあった住友合資会社の本社建物であった。四半世紀にわたって学部生の学び舎であった大学本館は、昭和29年(1954)、老朽化のために取り壊され、その跡に法文学舎としての「第1学舎1号館」が建てられた。さらに平成8年(1996)、現在の「第1学舎1号館」と「あすかの庭」に生まれ変わった。

クラブハウスから以文館へ



大正15年(1926)に落成したクラブハウスは、木造2階建の潇洒な建物で、応接室や歓迎室、読書室などを有し、学生の集会などに使用された。

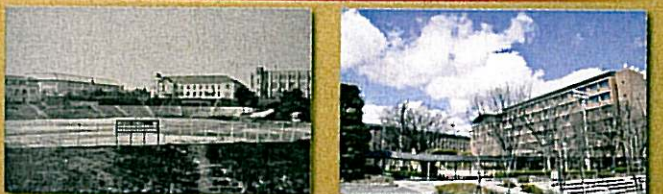
クラブハウスは外観をそのままに、一部改修しながら平成14年(2002)まで保健管理センターとして学生、教職員の診察、治療に活用された。平成15年(2003)、法科大学院棟である以文館の建設に伴って取り壊された。

大学図書館の移り変わり



左は、昭和3年(1928)に竣工した大学図書館の建設中の写真である。鉄筋コンクリート造、3階建(図書館部分)と5階建(書庫)の建物には、昭和初期の建物らしく随所に意匠が施された。その後、昭和30年(1955)に大幅な増築が行われた。昭和60年(1985)、新しく完成した総合図書館へ移転したあとは、平成6年(1994)、博物館が開設された。この建物は平成19年(2007)に国の登録有形文化財となっている。

大運動場



400mトラックとコンクリート製スタンド(6000人収容)を有し、大正15年(1929)に完成した大運動場は、当時東洋一のグラウンドと称された。のちにこの大運動場は「第1グラウンド」と呼ばれるようになったが、その南半分が昭和60年(1985)、日本でもトップクラスの総合図書館として生まれ変わった。さらに平成12年(2000)には北側部分に「尚文館」(大学院棟)が建てられた。

予科校舎



大正11年(1922)4月下旬に完成した予科校舎は、千里山キャンパスで最初に建てられた校舎である。残念ながら昭和9年(1934)、火災により全焼した。

予科校舎があった場所には現在、法科大学院等の建物である以文館が建っている。両脇にある八角ドームは、昭和2年(1927)から同29年(1954)まで存在した大学本館のシンボルをモチーフとしてデザインされた。

大学前駅と大学前通り



写真左は大正12年(1923)ころの「大学前駅」である。駅間が短かったため、昭和39年(1964)、「大学前駅」と隣の「花壇町駅」とを統合して現在の「関大前駅」となった。

右は現在の大学前通りである。大正10年(1921)ころ、正門へと通じる道のまわりには桃や柿などの果樹園が広がっていたが、現在は飲食店やコンビニエンスストア、ゲームセンターなどが立ち並び、にぎやかな学生街となっている。

長き歴史 「関西大学学歌」

「自然の秀麗 人の親和」で始まる「関西大学学歌」は、今から90年前の大正11年（1922）9月、大学に昇格してほどなく制定された。

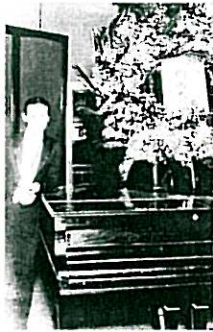
校歌はすでにそれ以前から存在していたが、新時代の到来を象徴する「大学の歌」が待望されたのである。作詞は関西大学教授の服部嘉香、作曲は音楽界に新風を吹き込んでいた山田耕筰に依頼された。

学歌の作詞にあたって本学首脳陣は「真理の討究」や「人格の陶冶」を始めとするいくつかのキーワードを織り込むよう要望し

た。そして、ひとまず完成した歌詞に対しては、服部と山岡順太郎総理事、宮島綱男専務理事の3人が、前後三回にわたって推敲を重ねたことが記録に残っている。

一方、学歌完成後、作曲者の山田耕筰は歌唱指導と講演、さらにレコード制作のため、三度本学を訪れている。

山田耕筰による二長調のメロディは、理想に向かって進む学生の意気を力強く歌い上げるとともに、荘重にして高い格調により、今後も関西大学のシンボルソングとして永く歌い継がれていくであろう。



山田 耕 筰

明治19年(1886)～昭和40年(1965)
東京音楽学校声楽科（現在の東京芸術大学）を卒業し、日本語の抑揚を活かしたメロディで数多の作品を残した。



服 部 嘉 香

明治19年(1886)～昭和50年(1975)
早稲田大学英文科を卒業し、早稲田大学講師を経て関西大学に奉職する。文学者であり、豊かな学殖をもとに学歌を作詞した。

大学、学生、校友間の絆「学報」

「学報」は大正11年（1922）6月5日の大学昇格を記念する事業の一つとして創刊された。70号までは「千里山学報」と称していたが、71号から「関西大学学報」と改められた。改称のきっかけは天六学舎の新築であった。

「学報」は、大学と校友、学生間の情報連絡誌と研究誌双方の役割を併せ持つ冊子として刊行が続けられたが、戦時色が濃くなり、大学規模の縮小や用紙統制などの事情によって昭和20年（1945）3月には休刊に追い込まれた。

戦後、昭和22年（1947）に「学報」は復刊され、特に12月発行の226号「関大ルネッサンス特集号」は戦後の荒廃した学生たちの心に勇気と希望を与えた。

時代の推移とともに、校友の情報については、昭和30年（1955）5月から発行されるようになった校友会の機関紙「関大」が担い、学内の情報は昭和36年（1961）4月から発行された「関西大学広報」に引き継がれた。

学園紛争期に入り、すでに不定期刊行であった「学報」は昭和43年（1968）3月発行の350号をもって46年に及ぶ歴史の幕を閉じた。翌年から広報委員会が編集・発行する「関西大学通信」が学生に対する情報紙の役割を受け持つようになった。

関西大学の機関誌は、戦争、学園紛争という二つの激動期を乗り越え、姿を変えながら、90年前の大学昇格時から連綿とその歴史を紡いでいる。



関西大学年史編纂室

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
関西大学千里山キャンパス 簡文館内
TEL: 06-6368-1062 (直通)
URL: <http://www.kansai-u.ac.jp/nenshi/>